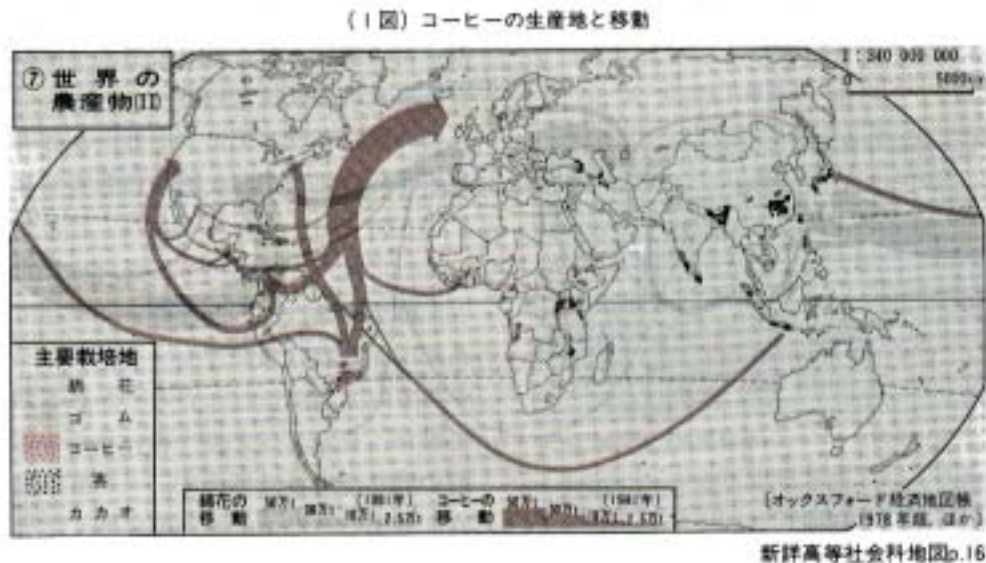


コーヒーとその背景



〔はじめに〕

現在、コーヒーは北緯 25 度から南緯 25 度の間の「コーヒーベルト」と呼ばれている地域で生産されている。アジア、アフリカ、中南米にわたるこの地域のコーヒー生産国は約 40 か国である。その多くが開発途上国で、累積債務や深刻なインフレに悩む国が少なくない。そうした産地国ではコーヒーは外貨獲得のための輸出農産物としての重要な意味を持つ貿易品目であり世界貿易に占める重要性も無視できない。

本稿では、コーヒーの歴史的な背景を探りながら、コーヒーの持つ社会的・文化的な意味を考えてみたい。

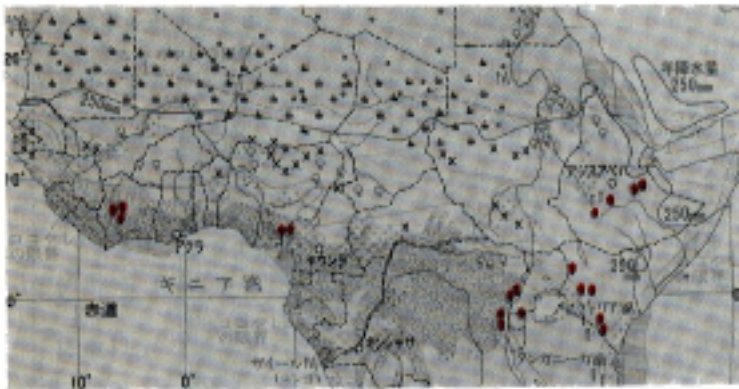
〔コーヒーの伝播〕

コーヒーはエチオピアのアビシニア高原が原産地であるが、その原産種は学名「コヒア・アラビカ」で通常はアラビカ種と呼ばれるものである。他に同じアフリカのコンゴ原産のロブスタ種とリベリア原産のリベリア種があり、あわせてコーヒー三大原種という。

アラビカ種の品質が最も良く、生産量も全体の 70%を占め、ついでロブスタ種が 20%～30%で、リベリカ種は病虫害に弱く生産、消費とも限られており、日本ではなじみがない。

コーヒーが世界の飲料となる基礎を作ったのはアラビア人であった。エチオ

(2図) アフリカのコーヒー生産地 (● : コーヒー)



新詳高等社会科地図p.52

ピア原産のコーヒーが

紅海を渡ってアラビアに伝えられたのは 10 世紀から 11 世紀の初めと考えられる。コーヒーは、最初、イスラム教の僧侶の秘薬として入ってきたが、15 世紀頃にはイエメンで栽培されはじめ、一般のアラビカ人の間に広まっていき、イスラム文化圏のエジプト、トルコにも伝わった。

かくして、16 世紀には各地で「カフェ」が登場し、茶と並ぶ世界の二大飲料の喫茶の習慣がイスラム世界に確立した。しかも、茶が中国文化圏を中心に発展したことを考えれば、「茶を飲む」習慣は広くアジア圏に発祥したといえよう。

〔植民地主義とコーヒー〕

アジア圏で生まれ、育った茶とコーヒーは 17 世紀初頭にヨーロッパに伝わっている。ヨーロッパで最初にコーヒーが伝えられたのはイタリアで、ベニスの商人によってもたらされた。

その頃、すでにオスマン＝トルコによるイスラム圏拡大によって、コーヒーも地中海貿易の檣舞台に登場していたのである。

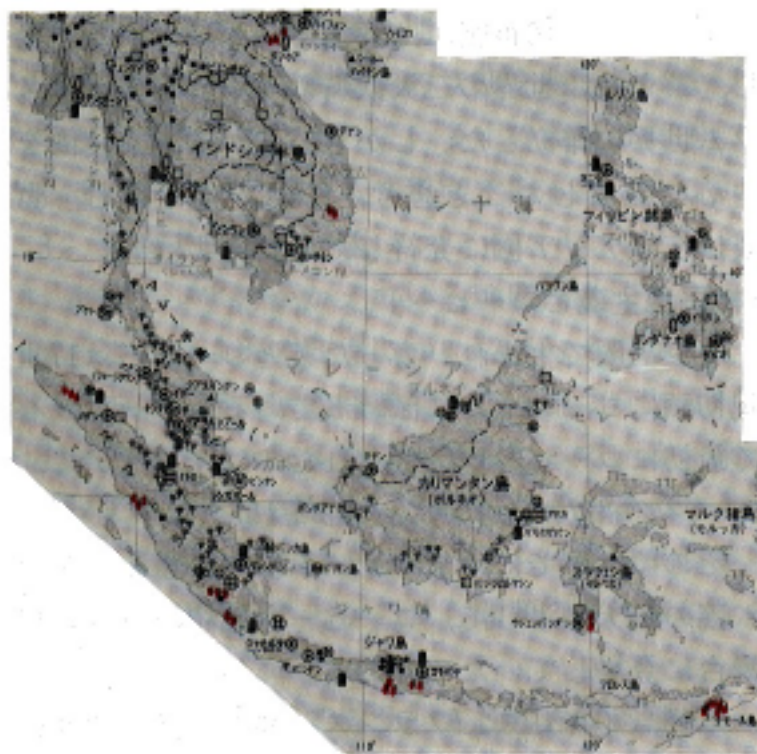
以降、イギリス、フランス、オランダに次々に伝わり、「イスラム教徒の飲料」として敬遠されていたコーヒーがヨーロッパ人に定着していった。

当時のヨーロッパ諸国は大航海時代の成果をもとにアジア、アメリカ大陸に植民地を競い合って作っていた。そうした中でコーヒーとであった彼らは、エチオピアとアラビアの一部にしか栽培されていないコーヒーを自国の植民地に移植し、自国のコーヒー需要をまかなおうとした。

オランダがインド、スリランカからインドネシアにかけてコーヒーを移植したのをはじめとして、フランス、イギリス、スペインなどがアジア、中南米、そしてアフリカのコーヒーの自生していない地域へと、コーヒー産地を広げていった。

つまり、現在のコーヒーベルト地帯の形成はヨーロッパ諸国の植民地経営によってなされたといっていよいだろう。当時、植民地貿易の需要産品としてコーヒーが注目されたのは、コーヒーが種子を乾燥させた状態で運搬できたためそれほど重くなく、当時の航海技術によっても遠隔地輸送が可能だったからである。

(3図) 東南アジアのコーヒー生産地 (●: コーヒー)



新詳高等社会科地図p.45

コーヒーは、ヨーロッパ各国の植民地政策によって大量生産されるようになり、18世紀にはカフェを中心に多くのコーヒー愛好家が生まれ、文化的にも認知された。

〔コーヒーの飲み方の伝播〕

エチオピアに自生したコーヒーはまず食べ物として、果実ごと砕いて油で練り団子のようにされていたようである。現在でもエチオピアにはコーヒーを食

べる部族がいる。

ついで、アラビアにコーヒーが伝わると、その種子を砕いて煮出した液汁に香料を加えた「サルタナ・コーヒー」が生まれた。これが最も古いコーヒーの飲み方であろう。さらに 13 世紀頃になると、種子を煎ったものを砕いて煮出す方法で飲まれた。これは現在でもトルコ・コーヒーともターキッシュ・コーヒーともいわれる飲み方で残っており、ジュズベという長い柄のついたひしゃく形の器具を使って煮出す。コーヒー豆は深煎りされ、煮出されたコーヒー液は濃くどろどろしている。

ヨーロッパではいち早くカフェを開いたイタリアでは、エスプレッソという器具を使っての飲み方が盛んであるが、これなどはトルコ・コーヒーのマシン化ともいえるだろう。煎り方の度合いも、トルコよりイタリアは浅くそれがイタリアン・コーヒーと呼ばれ、次にフランスに入るともう少し浅い煎り加減になり、フレンチ・コーヒーと呼ばれる。以後、ドイツのジャーマン・コーヒー、アメリカのアメリカン・コーヒーと、その煎り方、濃度は薄くなっていった。

すなわち伝播していくにしたがってコーヒーは薄く軽い飲料となってしまった。これは、例えばお茶が「濃茶」から「薄茶」、「煎茶」へと薄くなっていったのと似ている。つまり、トルコ式の濃いコーヒーは、茶の初期の濃茶がそうであったように、宗教的な意味合いを持つものから、大衆的なお茶になっていった。宗教的意味とは、心身を活性化し、より宗教的境地に近づくためのものということである。宗教家の次のコーヒーの愛好者は芸術家たちであり、思想家たちであった。

ここで現存するコーヒーの出し方を紹介しよう。コーヒーを煎って煮出す、というのが現存する飲み方のもっとも古典といえるがこれがヨーロッパに渡り、洗練化されると煮出した上澄みを飲むトルコ式から脱却して、18 世紀には煮出したものを布でこすようになる。さらに、19 世紀初頭、フランスでは、煮出さず、1 回だけ上から熱湯を注いで出す「ドリップ・ポット」が作られ、主流となった。以降、イタリアのエスプレッソをはじめ、イギリス人によって発明されたサイフォンなどの器具が考案された。

一般的な傾向としては、コーヒー産地の方が古典的な、トルコ・コーヒーに近いスタイルを墨守しており、新参の消費国（アメリカや日本）ほど薄い、かつて宗教的意味まで持った飲料から遠いものとして飲まれている。

〔日本における伝播〕

日本にコーヒーがもたらされたのは 17 世紀末、オランダ人によってだが、当時、鎖国状態の日本には定着するすべもなかった。19 世紀末、つまり明治の初期の頃からコーヒーの輸入も始まり、日本でのコーヒー史がスタートした。以後、コーヒーは明治政府の脱亜入欧と殖産興業政策による資本主義の成立によって、輸入量が徐々に増えていった。

しかし、その背後には、日本人による宗教的・文化的コーヒーへの接触は見られず、主として国の貿易政策の中で、コーヒーは貿易の手段とされた。例えば、日本の重要輸出産品であった絹織物を売りつけるために、コーヒー植民地経営者からコーヒーを買うなどといったことが行われた。

コーヒーが貿易という経済的意味で国民に浸透していった構造は、日本では戦後もかわらない。(経済的意味でコーヒー輸入が格段に減った例がイギリスであるのは周知の事だろう。イギリスの東インド会社がコーヒー貿易においてフランス、オランダとの競争に破れ、一転してインドにおける紅茶の輸入を増加し、国民からコーヒーを取り上げ紅茶を定着させた。)

その構造とは、工業生産物をダイビング価格で輸入し、その損失分を一時農業産品を輸入し、それを加工して国内で売る付加価値分を補ったというものであり、その加工産品の原料として、小麦と並んでコーヒーがまさに注目され、輸入量を伸ばしてきたのである。〔現在のコーヒーの状況〕

ブラジルの大早魃を契機に、コーヒー相場の急騰が伝えられた。日本における末端価格も生豆 1000 円 / kg 前後が、1800 円 / kg ほどに上がった。この背景には、投機筋による相場の恣意的操作があると考えられる。コーヒーの世界貿易は、クォータ制と呼ばれる輸出割当制度によって価格の安定がはかれるようになってきている。これは、需要と供給のバランスを均衡させるために、主に供給の増えすぎによる値崩れをふせぐためであったのだが、今回の値上げ騒ぎはこのクォータ制がアダとなってしまう、空前の急騰を招くことになった。

つまり、国際コーヒー機構 (IOC) に加盟した各産出国別に輸出枠が定められており、ブラジルの早魃、アフリカの大飢饉というキャンペーンが張られただけで、各国のもつ大量の在庫や潜在の輸出能力にもかかわらず、容易に相場が上がってしまったのである。IOC はこれに対応して昨年 10 月にはクォータ制をはずしたのだが、すでにはずみのついた相場にストップはかけられなかった。

(4図) ブラジルのコーヒー生産地 (●: コーヒー)



新詳高等社会科地図p.84

〔おわりに〕

1 杯のコーヒーから見た歴史、経済、文化はとても与えられた紙面では語り尽くせない広がりと深さを持っている。最後に、本稿を終えるに当たり、「良いコーヒー」について触れたい。

前述したとおり、イスラム文化圏やヨーロッパではコーヒーは宗教的な意味を持つとともに、健康食品とは、胃腸の消化をたすけ体を活性化させてくれるということだが、残念ながら日本ではそこまでの定着をみていない。今後、嗜好品としてのコーヒーという、欧米文化の象徴としてのファッション性から脱却して、煎りたての新鮮な、体にも良いコーヒーをわれわれの文化の中に根づかせなくてはならないだろう。

産業技術研究所講師 田口 護

1986年9月

株式会社帝国書院刊

「地図に見る現代」1986.vol.14収録

*本稿は帝国書院刊「高校生の現代社会・初訂版」94ページ"価格は需要と供給を調節する"の参考分野地図の解説として書かれた。